

チャペルの思い出

御厨 章雄（1949年専門学校経済卒）

白金の丘に聳え立つチャペルは銀杏で敷き詰められた坂道を登る人々をいつも見守り迎えて下さいます。

明学のシンボルであるチャペルは今年で献堂100周年を迎える事が出来ました。

神様に感謝致します。チャペルは長い間多くの職員により、保守を重ねられて、今も神に献げる礼拝がまもられて私共をいつでも招いて下さいます。

戦時中は英語は使用禁止で講堂と呼んでいました。当時のチャペルの外観は今と変わらない様ですが、ホールに入ると大分古くなって居り、特に二階席は使用禁止でした。奏楽の演奏は正面ステージの左袖にセットされたリードオルガン。演奏室から流れる奏楽は担当者が後方にリードオルガン演奏室から見えない所より労力を使って手押しポンプで送風されて居りました。

私は1942年（昭和17年）4月晴れて入学が許可され、入学式は荘厳なクラシック音楽が流れるチャペルに案内されました。希望と好奇心一杯の気持ちで木造りの長椅子にクラス毎に並んで座り、キリスト教に初めて触れる事が出来ました。当時の服装は国防色の学生服、戦闘帽、編上げ靴、ゲートル姿でチャペルに合わない戦時色で統一されてました。学内には現役配属将校と立派な髭をはやしたダルマとよばれる教練教官が常駐されてました。

しかし大きな軍部よりの干渉も無く、礼拝が守られました。陸軍より派遣された強い権力を持った将校だと感じてましたが、毎日 矢野貫城元院長・漆原元中学部長他先生方が交替にて礼拝が守られた事は矢野元院長の大変な努力により、チャペルの礼拝が守られたと思います。配属将校はチャペルの中でも軍刀を両手で持ち、椅子に座っている姿を憶えます。毎朝授業前に学年別、クラス別に校庭に整列して朝礼を受け、整列のままチャペルに向かい、礼拝を守り、出口にて学生課の先生より配布された出席票に記入して教室に向かいました。しかし、戦争が激しくなり、毎朝の礼拝は困難となりさらに学徒動員令が下され、授業は中止となり、指定された軍需工場に動員されて、チャペルも無人となりました。その間市電の中より荘厳なチャペルをただ眺めるだけでした。

戦後まもなく復学となり、学生たちは平和を噛みしめながら坂道を歩き、左手に無事戦火を免れたチャペルと対面して学院に戻ったと言う実感を受けました。戦後は心の傷を負い、生きる道を失った復員兵も加わり、朝の荘厳な奏楽に迎えられてチャペルいっぱいになる程の学生により、みことばを求めて朝の礼拝が行われた。賛美歌は学院独自に編集されたのが使用された。

次第にキリスト教への求道心が高まり、戦後はキリスト教学生運動のトリゲとなったのはチャペルでした。多くの内外の宣教師達が招かれて集会が持たれた。

主催者は学院宗教委員でSCA（元YMCA）の部員も積極的に活動を進めた。

またチャペルでは宗教音楽を中心として男子のコーラス部（当時は男子校）が秋元教授他多くの先生により再開した参加者は約20名でした。私もその一人でした。練習もチャペルで行われた。今は名称を変え男女学生により盛大に活躍されている。またチャペルを残そうと坂野両脇に外部から画家達がグループにて、その姿をキャンバスに収め様と筆を進めている姿を見ることが出来ます。今は毎週月曜日～金曜日の午後0時35分～55分迄、チャペルアワーとして集会を守って居ります。どなたでも参加出来ます。どうぞお出かけください。チャペルは同窓生をいつでも、お帰りなさいと迎えて下さいます。